

【「お前が娘でよかった」と言われたくて】

千穂ちゃんが体の異変に気づいたのは12歳のときだった。秋の運動会の練習中に足が動かなくなった。それが彼女の人生の第二ステージの始まりだった。

住み慣れた熊本県阿蘇地方の実家を離れ、熊本市内の大学病院に入院。医者は「手術すればまた走れるようになれるよ」と励ました。「はい、頑張ります」と12歳の少女は手術台上った。

圧迫性脊髄炎。母親には真実が伝えられていた。かなり難しい手術だということが。母親は1%の可能性を信じたが、翌日、待っていたのは残酷な現実だった。

目が覚めた千穂ちゃん、胸から下の感覚が全くなくなっていった。足の動かし方が分からない。医者からあちこちを触られたが、触られている感覚がなかった。目の前が真っ暗になった。

千穂ちゃんの心は悲しみと怒りが入り乱れた。母親が口に入れてくれたものを母親に向かって吐きつけたこともあった。母親はただ黙って顔に付いたご飯粒を取り除いた。

千穂ちゃんの家は農家だった。農繁期になると昼間母親は付き添いに来れない日が多くなった。千穂ちゃんは病室に持ってこられた入院費の請求書を目にするようになる。二度、三度と受け取る度に、請求額が増えていった。

「どんなに長く入院しても私の足はもう元に戻らないんだ」、千穂ちゃんは医者に退院させて欲しいとお願いした。**「歩けないけど、笑顔はつくれる」**、退院の日まで笑顔の練習をした。

入院から4ヶ月後、退院することになった。熊本市内から阿蘇までタクシーを奔らせた。家に着くと、父親が抱っこして家の中に連れて行った。思いもしなかった光景がそこにあった。近所の人たちが1品持ち寄って退院祝いをしてくれたのだ。

懐かしい阿蘇弁で迎えられた。笑顔の練習をしていたのに、涙が溢れて止まらなかった。

それから16歳まで家から出ることはなかった。一人家にいると「私、生きていていいのかなあ」と思い悩んだ。でも、死ぬことだけは考えられなかった。お父さんお母さんの悲しい顔が目浮かぶから。

父親は言った。**「障害があろうとなかろうと、千穂は俺の娘ばい。その体で生きろ。障害は悪でも恥でもなか。胸を張って生きろ」**

心ない人もいた。家に来た知り合いにこう言われた。「あんたが長い間、入院していたせいで、父ちゃんは田畑を売ったとよ」

あの入院費をどうやって支払ったのか知らなかった千穂ちゃんは、ものすごくショックを受けだが、同時にこう思った。「あの人が親でなくてよかった。私の親は私に向かってそんなことを一生口にするような人じゃない」

そして、もう一つ分かったことがあった。「苦しんでいたのは私だけじゃない。家族みんなが私と一緒につらい思いをしていたんだ」と。

千穂ちゃんは思った。「この両親から、いつの日か、『お前が娘でよかったよ』と言われる娘になりたい。だから『動かない体でもこんなに幸せになれるんだよ』と言えるような生き方をしよう。この体で自分が望んでいる幸せに向って生きていこう。できたら世界一ステキな障害者になろう」と。

その日から千穂ちゃんは、幸せに向って歩み始めた。

【どこの家よりもこの家に生まれてよかった】

前述した千穂ちゃんこと野尻千穂子さんは、昭和22年熊本県阿蘇郡白水村に生まれた。12歳のときに障害者になった話には続きがある。

17歳のとき、「**世界一ステキな障害者になろう**」と決意してから、彼女はまずトイレ訓練を始めた。胸から下の感覚がないので、トイレに行きたくなる感覚がない。這ってトイレまで行って、おむつをはずし、膀胱を刺激して尿を出す。このため1回のトイレに20～30分かかった。

二十歳になったときは車の免許も取った。福祉に関する活動にも積極的に関わった。そして訪れた縁談話。お見合いを勧められた。「一生に一度くらいお見合いするのもいいかな」と軽い気持ちでOKした。

両足に障害のある男性だったが、2人は初めての出会いで結婚を決めた。
それから数ヶ月後、野尻さんのお腹に新しい生命が宿った。しかし、このおめでたは誰からも祝福されなかった。
医者「麻痺しているお腹の中で正常に赤ちゃんが育つ保証ができません」と中絶を勧めた。
一番の味方だった父親も「父ちゃんは千穂子が大事じゃ。赤ちゃんは産むな」と言って泣いた。
一人だけ「産んだらよか」と言ってくれた人がいた。夫だった。「**障害のある子が産まれたら、『仲間が一人増えた』と思って、一緒に育てていこう**」と言ってくれた。
奇跡が起きた。赤ちゃんが10ヵ月もの間、お腹の中で育ったのだ。帝王切開をすることなく、自然分娩で産まれた。
娘がまだ小さい頃、「高い高いして！」とせがんできても、2人とも高い高いしてあげられる体を持っていなかった。「私たち、親になって本当によかったのかな」と悩んだ日もあった。とにかく「お前は愛されているんだ、ということを実感できるような子育てをしよう」と誓い合った。
娘が11歳の誕生日のときだった。「生まれるまでのいきさつを正直に話したほうがいい」と思って、野尻さんは言葉を選びながら話した。娘は最後まで黙って聞いていた。聞き終わると思いがけない言葉を2人の親に向かって言った。
「お父さんお母さん、私はどこの家よりもこの野尻家に生まれてこれてよかった」
その日、野尻さんは嬉しくて嬉しくて、なかなか眠れなかった。
娘さんはその後、成人し、「**私はたまたま健康な体をもったので、この体を人の為に使いたい**」と言って看護師になった。
野尻さんは、熊本県のいのちの憩談会の代表として、あちこちで講演をしている。ある小学校で最後にこんな話をされた。
「夫婦になったこと、親になれたことをもっと感謝して下さい。子どもを産むと自分がやりたくてもできないことがいくつも出てきます。でも子育てほど素晴らしい仕事はないと私は信じています」
「人は誰かを愛するために生まれてくるんだと思います。そしてそのために誰にでも『一人分の苦勞』を与えられるんだと思います」

～「みやざき中央新聞」社説より

話の中に信じがたいほど崇高な言葉がたくさん出てきて、思わず感動し目頭が熱くなってたまりません!!

生きるとは～親と子の関係とは～夫婦とは～子供を授かるとは～深く深く考えさせられます!!

私自身、野尻さんの娘さんの・・・

「私はたまたま健康な体をもったので、この体を人の為に使いたい」

との言葉をしっかり受け止め、歩ける事～動ける事～
家族がある事～いや生きている事自体を決して

「あたいまえ」とは思わず、**「ありがたい」**という感謝の
気持ちを持って日々～一日一日過ごそうと思います!!

